

SBTの遺伝子標識に関するサンプリング設計の初期費用及び精度推定

要旨

資源量推定手法において用いられる近縁遺伝子手法や遺伝子標識再補（例えば遺伝子標識）のようなDNAプロファイリングのコストは、新たな技術や遺伝子マーカーの開発に伴い、急速に低下している。これは、いくつかの商業的に漁獲される資源の通常モニタリング及び評価において、これらの手法が今や実行可能であることを意味する。SBTのケースでは、資源の異なる構成要素（若齢魚と亜成魚）ごとの資源量と死亡量をモニターできる可能性がある。遺伝子標識手法の利点として、資源評価、オペレーティングモデル及び管理方式における類似漁業ごとの推定に利用できる可能性があること、2006年のCCSBT通常型標識計画の中止に起因する報告率問題の影響を受けないことがある。近縁資源量推定プロジェクトの成功裏の完了は、高水準に品質管理された遺伝学的手法で関連づけられた大規模なサンプル及びデータセットの処理、管理及び分析が実際に実行可能であることを証明した。別の遺伝子標識研究の設計で用いている規定レベルの精度（多様度の係数）を備えた資源量推定を得るのに必要な初期費用の推定額は、SBTでの運用が事業として今や実行可能であり、また費用対効果が高くなりそうであることを示している。ESCにおいて、共同調査の機会の可能性について議論するとともに、SBT資源の異なる構成要素のモニタリングへの遺伝子標識の将来的な利用の可能性を探るため、予備的分析を概説する。

